

リスクコミュニケーションの難しさはどこから来るか

甲斐倫明

大分県立看護科学大学

社会心理学の一分野から発展してきているリスク心理学は人のリスク認知の特性を明らかにしてきた。そこでは、リスク認知の専門家と一般市民との差異が強調される。恐ろしさと未知性の2因子でリスク認知を捉える Slovic 流の見方によると、福島事故とその後の低線量放射線問題の混乱は両方からきていると分析される。一方、専門家は事故を客観的に評価し、対応にはどの程度のコストが必要かなどの視点で実態を把握しようとする。このようなギャップにあって、ある専門家は学校教育の必要性を強調したり、一般社会のリスクに対する無理解をなじる。逆に、一般市民は専門家を信頼おけない存在として利益相反を疑う。リスク心理学が教えるところによると、一般人と専門家はリスクやハザードを認識するときの評価基準が異なるのであるから、スムーズなコミュニケーションを行うことはそもそも難しいというのだ（中谷内一也編、リスクの社会心理学、有斐閣、2012）。

リスク認知の点からリスクコミュニケーションは難しいという指摘以外に、さらに両者のコミュニケーションを難しくしているのは、専門家同士の知の共有ができていないことである。低線量放射線問題は、常に論争の種となり、現行の LNT モデルの推定値も過小評価と批判する専門家からホルミーシスを提唱する専門家までスペクトルの広さは誰がみてもどれが本当かを信頼できなくなる現状がある。100mSv 以下では影響を認められていないと説明する一方で 20mSv や 1mSv のさらに低い線量を管理目標にすることの説明が十分になされていない。このように、専門家そのものが十分にコンセンサスをもって社会に説明できる状況がない中で、リスクコミュニケーションは難しいといえる。

ではこの問題にどう向き合っていくべきなのか。リスクを合理的に低減することを旨とする放射線防護が福島事故後混乱をしたのは、上記で述べた側面以外に、目に見えないもの、とくに将来起きるかもしれない事象に対する不安は人間の本質として避けられないからであろう。この問題に対する一般的な解決策がないとすれば、個別の問題の中にリスクと向きあい制御する術、あるいはリスクを上回るベネフィットを享受できることを通してリスクと向きあうことしかない。津波対策としての防潮堤問題は一般的な解決策を提供することの難しさを理解して、現実の個別ごとの決定を尊重し支援する体制を行政が行っていくことであろう。また、将来生まれてくる子どもの健康に不安をもつ福島の高校生を前にして、その認知が間違いであることを説得しても恐らく簡単に解決する問題ではなく、それぞれの個別に抱えている生活と価値観の中で、私たち専門家が向き合い支援する姿勢をもつことであろう。